

ビルマ作戦従軍記

愛媛県 安藤 包明

私は大正九（一九二〇）年八月二十八日、安藤利吉の長男として愛媛県西条市丹原町池田八二四番地に生まれました。

父、母、姉、妹三人、弟三人と私を入れた十人家族でした。

家は専業農家で米・麦を作っていました。昭和二（一九二七）年四月、丹原尋常小学校に入学し、昭和十年三月三十一日同校を卒業し、農業に従事しておりました。

昭和十五年四月、農作業中に発動機の故障のた

め右手首に受傷し、手首が動かなくなり徴兵検査を翌月に控え残念でなりませんでした。

当時の青年としては軍隊に入り、国防の第一線に立つことが名誉であり誇りでもありましたから、徴兵検査で甲種か第一乙種に合格しなければ恥ずかしくて街を歩けませんでした。

明くる五月に徴兵検査では果たせるかな第二乙種合格で現役入隊の望みは断られたのです。昭和十六年十月、教育召集令状が来まして小倉の西部第六十二部隊に入隊しました。昭和十七年一月に召集解除になり三カ月の教育終了で帰宅しました。その頃は教育召集のあと赤紙召集が必ずくるから覚悟しておくように言われておりました。

果たして三カ月後の昭和十七年四月五日、召集

令状が来て、丸亀歩兵の第一百二連隊に入隊しました。そして七日夜、坂出港を出港しました。輸送船は貨物船「オハイオ丸」で六、〇〇〇トン。

兵隊は完全軍装でした。四月末にビルマのラングーンに入港、直ちに鉄道列車で北上しビルマ北端の終点ミートキーナに到着。直ちに歩兵第一百二連隊第三大隊第八中隊に編入されました。中隊長は空谷光友中尉でした。

私は教育召集の三カ月間に擲弾筒の教育を受けていましたので、擲弾兵となりました。そして第一小隊第一分隊に配属されました。分隊長は内海軍曹でした。三豊郡伊吹島の出身でした。

ミートキーナの西北方のフーコン谷地の中国軍の掃討作戦に従事しました。

その後、昭和十七年十一月までミートキーナから南方のミンムの警備に従事、空谷中隊長、山本中尉、岡少尉、伊藤軍曹、岡本軍曹が在隊しました。警備期間中、山本中尉の当番を命ぜられました。

昭和十七年十二月、ビルマ南端のバセインに第三大隊が移駐する。

昭和十八年正月は餅について東方の祖国を遙拝しましたが、当時は、戦地にいる感じがしませんでした。それも束の間、二月末にはインドとの国境に近いマユ半島で、第三十三師団の宮脇支隊（仙台編成）、佐古田支隊が英印軍と苦戦との報に、第一百二連隊が救援に出勤し、プロームからアラカオン山脈を越え、タンガツプ、アキヤブ、カメイ、ドンベークで戦闘をしました。

敵の英印軍のゴルカ兵は勇敢で、火炮も強力で、山容が変わる程猛烈な砲撃を受け、それに飛行機も加わり、これでは負けると思いました。

我が軍の火力は貧弱で、我が擲弾筒の弾丸が五発のうち三発が不発弾だったのにはまいりました。昭和十八年六月頃に「三十一号作戦」が始まりました。私は一人だけ千葉編成の速射砲部隊（野口中隊）に転属させられ、英軍戦車M4を相手に戦ったのですが、M4戦車の装甲板は厚く、速射

砲弾も跳ね返され戦闘にならなかったのです。

昭和十八年十二月、歩兵第一百十二連隊第一大隊に配属された、山砲部隊の護衛兵として勤務しました。山砲隊は山の上に砲を配置し、分哨に十一人を派遣し、私もその中の一人として分哨勤務についていました。付近の住民が「カボチャ」を売りに来ていました。

ある日、私はもう一人と二人で十一個の飯盒をブラ下げて山を下りていた時、分哨方向で手投弾の破裂音がしたと同時に自動小銃の銃声が聞こえてきました。敵はカボチャ売りを装って偵察していたのです。山上の山砲陣地は砲を撤収し、分哨は全滅し、死体収容は不可能となりました。

昭和十九年三月に「は号作戦」が発令され、連隊長が古谷朔郎大佐に替り、私は軍旗護衛小隊に派遣されました。

その内、マラリアとアミーバ赤痢に罹り、第四野戦病院に入院することになり、連隊長に申告にいきますと「気合が抜けとるから病気になるんじ

や」と言われ本当に情けなくなりました。

野戦病院ですから衛生兵だけで看護してくれましたが、炊事の火の燃えさしの黒い炭の粉が菓でした。下痢には良く効くとのたとえの通り良く効きまして、三カ月で退院でき本隊を追及しました。

途中ビルマの寺院に立ち寄り、お坊さんから供物をいただき、片言であいさつとお礼の言葉を交わしたりしました。

当時の住民の対日感情は親日的でしたが、日本軍がマンダレー撤退の頃から反日的になったようです。

昭和十九年七月にドンギヤン月形高地の戦闘で、私は夜襲のため擲弾筒と小銃を持って待機中に、敵の迫撃砲弾の破片で右下腿部砲弾片創を受け、第二野戦病院に入院しました。昭和二十年三月退院、本隊に追及しました。

「三一号作戦」の終了後、善通寺の第五十五師団は四分割され、歩兵第一百十二連隊の第一大隊、第二大隊と野戦重砲兵第五連隊第一大隊を基幹と

して「干城兵团」が誕生しました。

兵団長は桜井徳太郎少将であります。「三一号作戦」時の第五十五師団長は古関健中将。「ハ号作戦」時は花谷正中将でした。

第三大隊は花谷中将の護衛になり、モールメンで終戦を迎えております。

我が第一大隊は南部のモールメンで終戦を迎え、フランス軍の武装解除を受けました。同地で我が大隊は師団司令部の直轄となり、フランス軍との連絡要員として、モールメンに駐屯していた第十五飛行師団から英語・仏語に堪能な関伍長が、第一百十二連隊からは渡辺兵長と私の三人が仏軍司令部の一室に起居、食事は日本軍の給与で両軍の連絡に当たっていました。

ある日、隣の部隊から話声が聞こえてきました。越南軍（独立派）が蜂起して主謀者三人が逮捕され訊問されているのでした。それが二日間後には話し声が消え静かになりました。逃走したのですが、再び逮捕され取調べが再開されましたが、思

わぬ災難が私に降りかかるとは夢にも思ってもいませんでした。

仏軍に抵抗する越南軍の首領の逃亡の手助けしたのは日本兵の安藤だと白状したと言って、仏軍の命令で私は日本軍の司令部の一室に留置されてしまいました。無実を強く訴えましたが敗軍の弱身でなかなか聞いてもらえませんでした。

S 中将は私を呼び出して「安藤兵長、誠に忍び難いが明治維新の時の志士の気持ちになつてもらえぬか」と頼まれたので無実の罪をかぶせられる情け無さに涙がこぼれました。

一時は逃亡して親日家のビルマ人にかくまってもらう方法も相談していました。その時に英国軍が進駐してきましたので早速、関伍長が得意の英語で無実の罪に泣く日本兵の救助を頼んでくれたのが効を奏して、早速英軍から仏軍に申し入れがあり、私の釈放が決定され、無実が晴れ留置が解かれました。関伍長、渡辺兵長の二人の御恩は終生忘れられません。

北支・ビルマの戦場回顧

愛媛県 垣木 秀雄

昭和二十一年三月頃、仏印のコマイに退り食塩の積み込み作業を仏軍の指示でやらされました。六月、仏印のサンジャク港に退り、米軍の上陸用舟艇に乗せられ、六月十五日、大竹に上陸しました。昭和十七年四月坂出港を出港以来四年二カ月振りに日本本土に帰って来ることができました。翌七月から入隊前の職場に復帰、十月十五日に現在の妻啓子と結婚、三女の親として幸福な生活を送ることができました。

現在は農業に専念しております。今静かに過ぎし日々を思うと、命令とはいえ転属に次ぐ転属と仲間と別れて見知らぬ他の部隊に出されましたが、その基準はどこにあるのか、要は中隊に不要な兵隊の処置なのかと人事を怨んだものですが、しかしその結果が「生」に結びついたのだと逆に考えられる年令となりました。

西日本一の最高峰で四国山脈の主領・石鎚山(一、九八二メートル)並びに天狗岳連山の西端に位置する、標高九八六メートルの高縄山の山麓の菅沢村(現在、松山市菅沢町)に私は誕生しました。

両親の元に、姉一人、弟二人、妹一人の五人兄弟の長男で、七人家族でした。幼少の頃は、全国的に恐慌の嵐が吹き、私の村でも貧しさに立ち向かって、皆さん一生懸命に働いていました。そうした中にも、近隣の人達は人情味は厚く、昔から弘法大師様の教えを順守して、他人様には厚情を施し、自分には厳しいという風習でした。

農家にしましても、自作農はわずかで、大多数の人たちは大地主の田畑を借用耕作でした。世に云う小作人でした。

我が家は父親が(大本家)から独立して一家を構